

言語聴覚士 (ST) の ④ ～コミュニケーションの視点～

自立活動教諭 (ST) 小川会理

1. はじめに

言語聴覚士 (ST) は、言語・コミュニケーションに関すること、聴こえに関すること、摂食・嚥下に関することを中心に支援を行う職種です。今年度の研究テーマの中心である「自立」ということを考えた際に、人と接するという点ではコミュニケーションは重要なものになってきます。しかし、コミュニケーションを中心とする関わりは、「自立」に限られたことではなく、日々の学校生活の中でも行われているものです。また、その実践を積み重ねているのは日々、児童生徒に接している先生方であるという視点にたったときに、ST 実践報告ということよりも、コミュニケーションで大切にしたいことの一部を記載させていただきます。

2. コミュニケーションとは

コミュニケーションは、キャッチボールに例えられることが多いのですが、それは人と人の中で音声言語や表情などの信号が交わされるものであるからです。コミュニケーションという言葉の語源をひも解くと、〈コミュニケーション〉であり、意味は日本語の中で当てはめると〈共有する〉となります。つまりはコミュニケーションは、「やりとり」であり、なおかつ「共感性」をもつものであることが、コミュニケーションの語源からうかがうことが出来ます。

3. コミュニケーションの変容

現代の社会の中では、コミュカといった言葉にも象徴されるように、コミュニケーションの力が多く求められます。これは、社会の中の仕事の変容、時代の移り変わりの中で、複雑なコミュニケーションが必要になってきていることによるものであります。

4. コミュニケーション支援で大切にしたいこと

支援教育の中で「肯定的な表現を使うこと」「具体的な表現を使うこと」などということばが聞かれます。それは、分かりやすく受け入れやすい表現になるということと児童・生徒が自分自身にとって分かりやすい表現がどういった表現なのかを知ることが自己理解にもつながるからです。

それでは、個々にことばかけの変換表を作成してみましょう。(表1へ) ある研修で使用したもので、またいくつかの書籍にも記されているものです。そして、その作ったものを、周囲の人と比べてみましょう。研修会で使用した時は、肯定的・具体的にしたときに全く同じ表現ででてくることは、ほぼありませんでした。それほど、「〇〇しない」などといった言葉には、多種多様な言葉の意味が含まれていることを物語っていると思います。

5. 最後に

ある書籍の中で実践例を紹介された方が、のちに《「療育プログラム」が自閉症児のわが子の「心」を壊したのではないか?》といったタイトルの文章を發表されています。その文章に関してはここでは割愛しますが、その子に必要なコミュニケーションとは、何なのかを考える必要があります。

- ・こちらの都合を押し付けるためのスケジュールやタイマーになっていないか
- ・視覚的な手段も本人に必要な情報になっているか（見通しをつけるにあたっての支援に関してもどこまでの見通しが必要なのかなど）
- ・子どもの手に支援者の手を添えて文字を書かせるなどの根拠のないコミュニケーション手段をとっていないか…。

コミュニケーションをとることは日々行っていることだからこそ、難しいものだと思います。

(表1) 「肯定的・具体的な表現に変える」

1. 2. 3 一呼吸	言い換えてみよう	メモ
走らない		
うるさい		
かたづけて		
こぼしちゃ、ダメ		
こうやってみたら?		

6. 参考文献

「自閉症児のための絵で見る構造化～TEACCH ビジュアル図鑑～」 学研ヒューマンブックス 佐々木正美 宮原一郎著 (2004)

「黙って観るコミュニケーション」 atac Lab 武長龍輝 巖淵守 中邑賢龍編著 (2016)

「発達障害&グレーゾーンの3兄妹を育てる母の毎日ラクラク笑顔になる108の子育て法」 ポプラ社 大場美鈴 (2016)

「言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援」 学苑社 大伴潔 大井学編著 (2011)

「発達障害のある子の社会性とコミュニケーション支援」 金子書房 藤野博編著 (2016)